

A Contrastive Study of Comparative Constructions in Mandarin Chinese and Japanese

YUFEI

ABSTRACT

All objective existence of entities in the natural and human world, as well as emerging abstraction in the minds of mankind, exist more or less in terms of their differences with respect to the number of states and nature. In order to understand and distinguish the various differences between things, people conduct a “comparison”. Thus, “comparison” is not only the most important and most basic method, but also the common way of thinking in the process of human understanding of the objective world. This “comparative” way of thinking reflected in the research field of language is called “comparative category” in linguistic research and “comparative sentences” in syntactic research”.

All languages of the world have the concept of “comparison”. L. Stassen (1985) believes that the comparative structure gives hierarchical positions to two objects in the order of magnitude of a predicate. “Comparison” is not only an important word in the semantic category, but also highlights special aspects as an expression of “comparison”. The expression of the semantic category of specific syntactic structure is called “a comparative sentence”.

“Comparison” in language, as a ubiquitous and syntactic structure, has its own specific “semantic meaning” and “logical structure”. From the 1980s to the present, people have conducted research on “comparative sentences”; especially during the late 20th century, researches on “comparative sentences” culminated in the emergence of a large number of related papers. Researches on negative comparative sentences are not uncommon. In this study, based on previous studies, comparative sentences in Chinese and Japanese are divided into three types which are “equal degree sentences” “superior degree sentences” and “superlative degree sentences”. These three types are discussed using logical analysis in order to clarify the three types of comparative sentences.

中日両言語における比較構文の意味と論理

于 飛

0. はじめに

自然世界や人類社会において、存在している客観的事物および人間の頭で思い浮かべた抽象的な概念はその数量、状態や性質などは必ず異なるものである。人々はこの違いを認識し、区別するために、それらの事物を比較する必要がある。従って、「比較」は人間にとって極めて重要かつ基本的な方法であるだけでなく、客観世界を認識する過程においても共有すべき考え方であると言える。この「比較」という考え方が言語領域に反映すると、言語研究における「比較範疇」といわれるものになり、そして、それは文法研究におけるいわゆる「比較構文」である。

世界中のいずれの言語においても、必ず「比較」という概念が存在している。言語学者 L.Stassen (1985) は「比較構造は述語の量級において二つの事物の分級位置を確定する機能を賦与する構造である」と述べている。さらに、「比較 (comparison)」は言語において、最も重用な意味範疇のひとつであり、事物の特殊性を浮かびあがらせる表現式であることを指摘した。この「比較」という意味範疇を具体的な統語構造で表わしたものが「比較構文」である。

比較構造は言語において、普遍的に存在する文型構造として、その構造自体は特定の文型意味と論理構造を持っている。本研究は先人の研究を踏まえ、中国語と日本語の比較構文を「平等比較構文」、「差異比較構文」と「最上級比較構文」の三種類に分け論じることにする。

1. 中国語における比較構文の意味と論理

1.1 「比較」とは何か

まず、「比較」とは何かについて考えることにする。『現代漢語辞海』によると、「事物の異同関係を確定するための過程と方法である。まず、ある基準により、互いにかかわる事物を対照し、その共通点と相違点を確定し、その事物について分類をする。各々の事物の内部の特性におけるそれぞれの面から比較し、また、物の内在的な連関を把握し、物の本質を認識することである。(3543 頁参照)」という。

『国語大辞典言泉』は「二つ以上のものを互いにくらべ合わせて、それらの異同、優劣、共通点などを検討すること(1925 頁)」としている。

呂叔湘(1982)は以下のように説明した。「異同」、「優劣」はどちらも比較から生じる。二つの出来事には、それがもし完全に異なるのであれば、両者はかかわりがないといってよい。たとえば、

- (1) 今天热。(今日は暑い)
- (2) 你姓张。(君は張という)

例(1)と例(2)の文は関係性を有さない。また次の(3)、(4)の文における関係にも関わりがない。

- (3) 今天热、不去了。(今日は暑いから、行かない) — (因果関係)
- (4) 你姓张、又是济南人(君は張という名前で、また済南出身です) — (添加関係)

(3) のような因果関係と (4) のような添加関係は比較関係を構成しない。比較関係を構成するためには、共通する部分と相違する部分があり、相違点を見つけられる場合である。たとえば、

(5) 昨天热、今天更热。(昨日は暑かった、今日はもっと暑くなる)

あるいは相違の中から共通点を見つけられる場合である。たとえば、

(6) 你姓张、我也姓张。(君は張君で、私も張です)

これらは比較関係を構成できる。(呂叔湘 1982: 352 頁参照)

1.2 「比較構文」とは何か

「比較構文」について、馬建忠 (1898:190) は「同じ形容詞について、その似ている程度が一緒なのではなく、ちがいのあることが比較である」と定義している。呂叔湘 (1982) は「比較構文は、事物の異同あるいは優劣の比較関係を表す文である (190 頁)」と定義している。太田辰夫 (1987: 171—181 頁参照) は「比較には、絶対と相対の区別がある。「絶対比較」は比較する対象が文の中に現われない、「相対比較」は比較する対象が文の中に現れる。」と指摘している。このような解釈は意味上から「比較構文」を説明する。车竞 (2005) は統語構造から、「現代中国語の比較構文は、述語の中に比較語彙あるいは比較形式を含んでいる文である。」と定義している。

本稿は车竞 (2005) の見解に加えて、さらに「比較構文」は構造上からみると、「比較主体 (Subject)」、「比較客体 (Standard)」、「比較詞 (Mark)」、「比較点 (Points of Comparison)」、「比較値 (Result)」などで構成される (唐厚広 1997) という考えをとりいれる。比較というのは、二種あるいは二種以上の同じあるいは異なる事物、現象などについて比べて、その事物の特徴を説明する方法である。次の用例を見てみよう。

(7) 张三 比 李四 个子 高。(張三は李四より背が高い。)

X 比較詞 Y D W

例(7)の“比”は比較を表す語彙である。比較される対象(“张三”)は“比較主体”と呼ぶ。この“比較主体”は“X”と記す。比較の参照対象(“李四”)は“比較客体”と呼び、“Y”と記す。比較主体と比較客体の間に用いられ、比較する関係を表すあるいは比較の客体を導く語彙(“比”)を“比較詞”と呼ぶ。比較の結果を表す部分(“高”)は“比較値”と呼び、これを“W”と記す。具体的な比較を表す部分(“个子”)を“比較点”と呼び、“D”と記す(車 2005)。従って、中国語の比較文の構造は「X+比較詞+Y+(D)+(程度副詞)+W」と記述することができる(Dと程度副詞の位置は不確定で、省略される場合もある)。この構造のレベルの違いを判然とするために、ここで例(7)の構造を樹形図で表示する。

例(7)は樹形図で表示すると、下の図1になる。

図表1からみると、用例(7)の統語規則¹⁾は次の通りである。

- a. $S \rightarrow NP \quad VP$
- b. $VP \rightarrow Adv \quad VP$
- c. $Adv \rightarrow Vt \quad NP$
- d. $VP \rightarrow NP \quad Vi$

用例(7)の語彙規則²⁾は次の通りである。

$NP \rightarrow \{\text{张三, 李四, 个子}\}$

$Vt \rightarrow \{\text{比}\}$

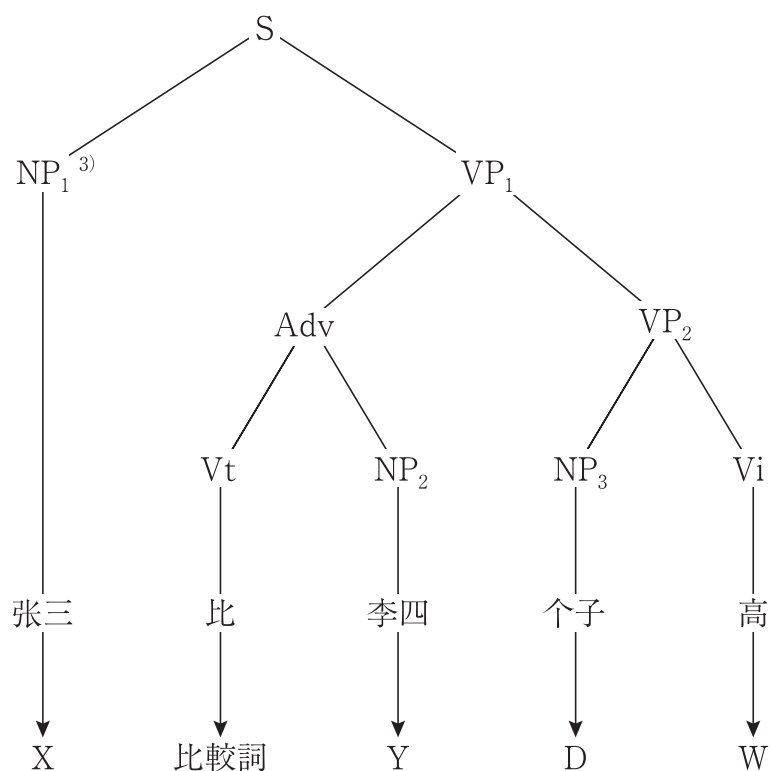
$Vi \rightarrow \{\text{高}\}$

1) 「統語規則」と2) 「語彙規則」については『逻辑语义学』(方立 2005) 第二章による。

『逻辑语义学』により、論理言語 Lt は自然言語と同様に統語部分を持つ。統語部分は語彙と統語規則を含んでいる。

語彙部分は次のようになる。

図 1



ここで、語彙規則と統語規則の記号について説明する。

Sは「文」である。NPは「名詞連語」、あるいは「名詞フレーズ」という。

Vtは他動詞である。また Viは自動詞である。(ここの“比”は前置詞であり、“高”は形容詞であるが、ともに動詞と見なすことができる)。

3) 樹形図の中の NP1、NP2 と NP3 の中の 1、2、3 は特に意味はなく、名詞連語を区別するためである。

1.3 先行研究

二十世紀八十年代から今日に至るまで比較構文についての研究は盛んに行われている。特に、二十世紀末期に比較構文の研究は頂点に達し、多くの論文が現れた。その中には、比較構文の形式構成について論じる論文や、比較結果の入れ替え規則についての論文、更には比較文の語用条件についての論文などがある。また、否定比較構文に関する専門的な研究も行われている。

比較構文についての先行研究をまとめると、次の図2になる。

図 2

代表学者	比較の範疇あるいは類型	比較の標識
馬建忠 (1898)	平等比較構文（平比文）	“如”、“若”、“犹”、“由”等
	差異比較構文（差比文）	“於”、“于”、“乎”、“焉”等
	最上級比較構文（极比文）	“最”、“至”、“极”、“甚”、“尤”、“益”等
吕叔湘 (1942)	類似（类同）	“也”
	比喻（比拟）	“象”
		“一样”、“似的”
		“如”、“若”、“是”、“为”等
		“並列構造”
		“隱語”
	近似（近似）	“象”、“似的”
	優劣（高下）	“一般”、“一样”、“有……那么……”、“如”等
		“否定差異式”
	低比較（不及）	“不如”、“比不得”、“赶不上”、“没有”
	高比較（胜过）	“更”、“比……还 / 更……”
高名凯 (1957)	最上級（尤最）	“最”、“尤”、“尤其”、“较（比较）”
	損得（得失）	“宁”
	非及（不如）	“孰与”、“与其……孰若 / 岂若 / 不若”、“不如”
	比例（倚变）	“愈……愈……”、“越……越……”
	差異級（差級） (comparative)	“更”、“益”、“愈”、“尤”
		“比……于……”
		“较（比、比较）……为……”
	最上級（极級） (superlative)	“最”或“最为”、“至”、“极”、“绝”、“殊”
		“……于……”
		“较（比、比较）……为……”

趙元任 (1968)	平等比較（相等）		“X 跟 Y 一样 A” “X 有 Y（那么）A”
	高比較（高于）		“比……更”、“……比……的多”
	低比較（低于）		“X 没（有）Y（那么）A” “不如” “不及”
	最上級（最高）		“顶”、“最”
	反最上級（反最高）		“最不 A”
	事物、性状の異同の比較		“跟……一样……”、“有……那么……”等
刘月华・潘文 娛・故韓 (1983)	性質、程度の差別と優劣の比較		“比”、“没 有……那 么……”、“……不如……”等
太田辰夫 (1987)	平等比較構文 (平比文)	相對的	“A 像 B 一样”
	差異比較構文 (差比文)	絕對的	“A 更……”
		相對的	“A 比 B ……”
	最上級比較構文 (極比文)	絕對的	“A 最……”
		相對的	(限定式) “A 在……中最……” (非限定式) “A 比什么都……”
黎錦熙 (1992)	平等比較構文（平比文）		“像（好像、像……似的）” “似（似乎、好似）” “好比（比如、譬如）” “犹如（如同、如……一样）” “和……一般”
			“无异于” “不下于（不减于、不让于）” “等于”、“相当于”
	差異比較構文 (差比文)	高比較（过于）	“赛过（赛似、胜过、过于）” “强于（强如）”
		低比較（不及）	“不如”、“不及”、“没有” “差似（次于）”
	選擇複合文（审决句）		“与其……宁可（还是）” “与其……不如（何如）”
赵金铭 (2001)	類似（近似）		“……像……”、“……好像……”、“……像……那么……”、“……像……似的”、“……似的”
	相当（等同）		“……跟……一样……”、“……跟……那么……”、“……跟……一般……”、“……跟……相同”
	高比較（胜于）		“……比……”、“……比……还 / 更……”、“……比……一点儿 / 一些……”
	低比較（不及）		“……不如……”

刘焱 (2004)	平等比較	相当	“X 跟 / 和 / 同 / 像 Y 一样 (R)” “X 等于 Y”
		類似	“XR,Y 也 R” “X 不比 YR”
		近似	“X 有 Y 那么 / 这么 R”
			“X 跟 Y 差不多”
	差異比較	低比較	“X 没有 YR” “X 不如 Y (R)” “X 比较 R” “X 不像 Y 这样 / 那样 R”
		高比較	“X 比 Y1R” (比 1 構文) “XR,Y 更 R” “越来越 . . .” “相 比 之 下 / 和 . . . 相 比, X 很 . . .”
			“X 最 / 顶 R” “连 X 都 / 也 R” “X 比 Y2 还 R” (比 2 構文)
		最上級	
车竞 (2005)	平等比較構文 (平比文)		“像”、“等于”、“抵上”、“抵得上”、“赶得上”、“有”、“像 . . . 一样”、“跟 / 和 / 同 / 与 . . . 一 样 / 相 同 / 相等 / 差不多”
	差異比較構文 (差比文)	X は Y と異なる	“跟 / 和 / 同 / 与 . . . 不 一 样 / 不相同 / 不相等”
		$X \geq$ あるいは $\leq Y$	“比”、“形容詞 + 于”
		X は Y の程度に及ばない	“赶不上”、“不如”、“比不上”、“不及”、“没有”
许国萍 (2007)	限定比較構文 (限比文)		“. . . 不 比 . . .”、“. . . 有 . . .”
	平等比較	相当	“X 跟 / 像 Y 那么 / 一样 R”
		類似	“X 有 Y (那么) R”
		最上級	“X 最 R”
	差異比較	優性比較	“X 比 YR”
		劣性比較	“X 不像 Y 那么 R” “X 不比 YR” “X 没有 Y (那么) R” “X 不如 Y (那么) R”

1.4 現代中国語における比較構文の論理構造と文型意味

ここで、筆者は先行研究を踏まえ、現代中国語の比較構文を「平等比較構文（平比文）」、「差異比較構文（差比文）」と「最上級比較構文（極比文）」の三種類に分けてそれぞれの論理構造と文型意味について考察してみたい。

1.4.1 現代中国語における平等比較構文の論理構造と文型意味

1.4.1.1 平等比較を表す“跟”構文の論理構造と文型意味

平等比較を表す“跟”構文の基本構造は「跟・・・一样」であり、この文型は平等比較を表す最も典型的な文型である。この中の“一样”のものの意味は「同様の・差別がない」の意であり、さらに“類似する”の意も表せる。自然言語における「跟・・・一样」の文型意味は“どの面についてもXはYと同じである”ことである。この文型の平等比較を表すキーワードは“一样”であり、“跟”の役割は比較対象を導入することである。ここの前置詞は“跟”以外、また“和、像、同”などを用いることができる。この類の前置詞の役割は“跟”とまったく同様であるから、“跟”構文に入れる。ここで、具体的な用例を通して、「跟・・・一样」構文の論理構造と文型意味を論じる。

(8) 说跟读一样重要。(話すことは読むことと同様に重要だ。)

この用例の論理構造は次のようになる。

～ト ハナス～ガ ヨム ～ガ アリ ～ニ ～ガ アル ～ニ

(8') 跟' [说' (φ)、读' (φ)、有' (说' (φ)、[重要 1]) & 有' (读' (φ)、

アル ～ガ ～ト

α β γ 1

[illegible] $\gamma 2$ $\gamma 3$

“説”は動詞であるので、函数の項になれない。函数の項になるためには命題でなければならない。そこで、第一項を“説’(ϕ)”と記述する。“ ϕ ”は不確定な動作主を表示する。同様に、“読”も“読’(ϕ)”という命題になおして、第二項に配置する。

次に、(8)の意味を説明する。この文は「話すことは読むことと同様に重要だという状態にある」という意味を表し、その複合命題は論理式では「跟' [说' (ϕ)、读' (ϕ)、有' (说' (ϕ)、[重要1]) & 有' (读' (ϕ)、[重要2]) & 有' {減' ([重要1]、[重要2])、[差数]} & 到' ([差数]、零)」のように表示できる。ここで、この論理式について詳しく説明する。「有' (说' (ϕ)、[重要1])」は「“話すこと”には論理形式の要素 [重要1] がある」の意を、「有' (读' (ϕ)、[重要2])」は「“読むこと”にも論理形式の要素 [重要2] がある」の意を、「有' {減' ([重要1]、[重要2])、[差数]} & 到' ([差数]、零)」は「[重要]の差は零」の意を表す。用例(8)の意味は前述のすべての命題を含まなければならない。さらに、 γ_1 では「说」と「读」が「経験者格」を、「重要1」と「重要2」が「対象格」を表すので、格役割を表示する。 γ_2 は減法で差があること、つまり数量化を表している。 γ_3 は差のないこと、言い換えれば差がゼロの量に達していること、つまり一種の「着点」を表している。

1.4.1.2 “跟” 構文の否定式の論理構造と文型意味

「跟・・・一样」構文の否定式は否定詞の位置により、二種類がある。ここで、この二種の否定式の論理構造から、具体的な用例の分析を通してその違いを説明したい。

1.4.1.2.1 「跟・・・不一样」

この否定式の否定詞は“一样”の前に位置する。

(9) 我的毛衣跟你的不一样。(私のセーターは君のと同じでない。)

この文の論理式は次のようになる。

$$\begin{array}{ccccccc}
 \sim\text{ト} & & \text{アリ} & \sim\text{ニ} & \sim\text{ガ} & \text{アル} & \sim\text{ニ} \\
 (9) \text{ 跟' [我的毛衣、你的 (毛衣)、有' (我的毛衣、[样子 1]) \& 有' (你的 (毛} \\
 \text{アル} & \sim\text{ガ} & \sim\text{ト} & & & & \\
 & \alpha & \beta & & \gamma 1 & & \\
 & \sim\text{ガ} & \text{ヒク} & \sim\text{カラ} & \sim\text{ヲ} & (\text{ナイ}) \text{ ナル} & \sim\text{ガ} \quad \sim\text{ニ} \\
 \text{衣)、[样子 2]) \& 有' 減' ([样子 1]、[样子 2])、[差数] \& \succ \text{到' ([差数]、零]} \\
 & \text{アル} & & \sim\text{ニ} & \sim\text{ガ} & & \\
 & & & & \sim\text{トイウ同ジデナイ状態ニ} & & \\
 & \gamma 2 & & & \gamma 3 & &
 \end{array}$$

次に、(9) の意味を説明する。この文は「私のセーターは君の（セーター）と“样子”という論理形式で同じでない状態にある」という意味を表し、その複合命題は論理式では「跟' [我的毛衣、你的（毛衣）、有'（我的毛衣、[样子 1]）& 有'（你的（毛衣）、[样子 2]）& 有' 減'（[样子 1]、[样子 2]）、[差数] \& \succ \text{到'（[差数]、零）」のように表示できる。ここで、この論理式について詳しく説明する。「有'（我的毛衣、[样子 1]）」は「“我的毛衣”には論理形式の要素 [样子 1] がある」の意を、「有'（你的（毛衣）、[样子 2]）」は「“（你的（毛衣）”にも論理形

この否定式の否定詞は“跟”の前に位置する。

この文の論理式は次のようになる。

(10') >跟' [我的毛衣、你的 (毛衣)、有' (我的毛衣、[样子 1]) & 有' (你的 (毛

$$\alpha \qquad \beta \qquad \qquad \gamma \text{ 1}$$

衣)、[样子 2]) & 有' [减' ([样子 1]、[样子 2])、[差数] & 到' ([差数]、零)]

 $\gamma^2 \qquad \qquad \qquad \gamma^3$

次に、(10')の意味を説明する。この文は「私のセーターは君の（セーター）と“様子”という論理形式で同じである状態に（ある）ない」という意味を表し、その複合命題は論理式では「 $\neg$ 跟「我的毛衣、你

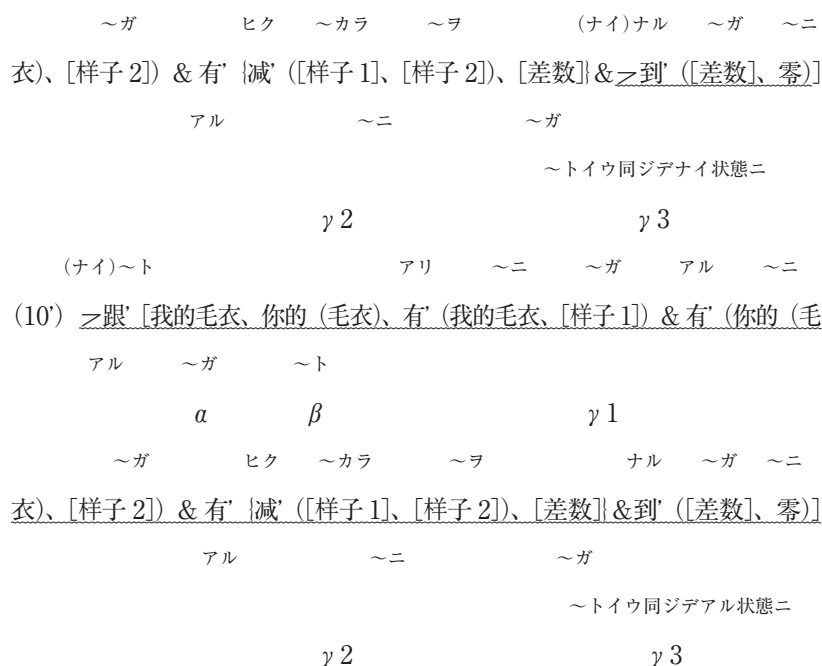
的(毛衣)、有'(我的毛衣、[様子1]) & 有'(你的(毛衣)、[様子2])
& 有' {減' ([様子1]、[様子2])、[差数]} & 到' ([差数]、零)]」のよ
うに表示できる。ここで、この論理式について詳しく説明する。「有'
(我的毛衣、[様子1])」は「“我的毛衣”には論理形式の要素 [様子1]
がある」の意を、「有'(你的(毛衣)、[様子2])」は「“(你的(毛衣)”
にも論理形式の要素 [様子2] がある」の意を、「有' {減' ([様子1]、
[様子2])、[差数]} & 到' ([差数]、零)]」は「[様子] の差は零」の意
を表す。「フ」は否定の意を表している。用例(10)の意味は前述のす
べての命題を含まなければならない。さらに、 $\gamma 1$ では「我的毛衣」と
「你的(毛衣)」が「経験者格」を、「様子1」と「様子2」が「対象格」
を表すので、格役割を表示する。 $\gamma 2$ は減法で差があること、つまり数
量化を表している。 $\gamma 3$ は差のないこと、言い換えれば差がゼロの量に
達していること、つまり一種の「着点」を表している。

1.4.1.2.3 「跟……不一样」と「不跟……一样」との異同

自然言語からみると、「跟……不一样」と「不跟……一样」との
意味構造はまったく同じである。例(9)と(10)の意味はどちらも
「私のセーターは君のと同じでない」である。

しかし、論理言語から考えると、「跟……不一样」と「不跟……
一样」との意味構造は異なる。

～ト	アリ	～ニ	～ガ	アル	～ニ
(9) 跟' [我的毛衣、你的(毛衣)、有'(我的毛衣、[様子1]) & 有'(你的(毛					
アル	～ガ	～ト			
α	β			$\gamma 1$	



(10) の否定詞の作用域は全体の文に至り（波線部分）、否定記号は“跟”の前に位置する。(9) の否定詞“不”の作用域はただ $\gamma 3$ の部分だけであり（波線部分）、否定記号は“到”の前に位置する。

1.4.2 現代中国語における差異比較構文の論理構造と文型意味

現代中国語における差異比較構文は“比”構文であり、その文型は「X+比+Y+VP」である。

1.4.2.1 “比” 構文の論理構造と文型意味

(11) 今天比昨天冷。(今日は昨日より寒い。)

この文の論理式は次のようである。

(11') 比' [今天、昨天、有' (今天、[气温1]) & 有' (昨天、[气温2]) &

次に、この論理式について詳しく説明する。「有' (今天、[気温 1])」は「今日には [気温 1] がある」の意を、「有' (昨天、[気温 2])」は「昨天には [気温 2] がある」の意を、「有' {減' ([気温 1]、[気温 2])、[差数]} & 到' { [差数]、有' (冷、多少) }」は「[気温 1] から [気温 2] を引くと差がある」の意を表す。「・・・比・・・冷」の“冷”は「はっきりした差がない」ことを表す。このことを「有' (冷、多少)」で表現することにする。用例 (11) の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、 γ_1 は「今天」と「昨天」が「経験者格」を、「気温 1」と「気温 2」が「属格 (対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。 γ_2 は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。 γ_3 は差がいくらかあること、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

1.4.2.2 “比”構文の否定式の論理式と文型意味

“比”構文の否定式は「X + 不 + 比 + Y + 形容詞」である。

(12) 今天不比昨天冷。(今日は昨日より寒くない。)

この文の論理式は次のようになる。

$$\begin{array}{c}
 \text{(ナイ)} \sim \text{ト} \qquad \qquad \text{アリ} \quad \sim \text{ニ} \quad \sim \text{ガ} \quad \text{アル} \quad \sim \text{ニ} \quad \sim \text{ガ} \\
 (12') \supset \text{比} \text{ [今天、昨天、有' (今天、[気温 1]) \& 有' (昨天、[気温 2]) \&} \\
 \qquad \qquad \text{アル} \quad \sim \text{ガ} \quad \sim \text{ト} \\
 \qquad \qquad \qquad \alpha \qquad \beta \qquad \qquad \qquad \gamma 1 \\
 \text{ヒク} \quad \sim \text{カラ} \quad \sim \text{ヲ} \qquad \qquad \qquad \text{アル} \quad \sim \text{ニ} \quad \sim \text{ガ} \\
 \text{有' \{減' ([気温 1]、[気温 2])、[差数]\} \& 到' \{[差数]、有' (冷、多少)\}} \\
 \text{アル} \qquad \qquad \sim \text{ニ} \qquad \qquad \sim \text{ガ} \quad \text{ナル} \quad \sim \text{ガ} \qquad \sim \text{ニ} \\
 \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \sim \text{トイウ状態ニ} \\
 \qquad \qquad \qquad \gamma 2 \qquad \qquad \qquad \gamma 3
 \end{array}$$

ここで、(12') の意味を説明しよう。この文の「今日は昨日より寒くない」という命題内容は論理式では「 $\supset$ 比' [今天、昨天、有' (今天、[気温 1]) & 有' (昨天、[気温 2]) & 有' {減' ([気温 1]、[気温 2])、[差数]\} & 到' {[差数]、有' (冷、多少)}]」のように表示できる。次に、この論理式について詳しく説明する。「有' (今天、[気温 1])」は「今日には [気温 1] がある」の意を、「有' (昨天、[気温 2])」は「昨天には [気温 2] がある」の意を、「有' {減' ([気温 1]、[気温 2])、[差数]\} & 到' {[差数]、有' (冷、多少)}」は「[気温 1] から [気温 2] を引くと差がある」の意を表す。「・・・比・・・冷」の“冷”は「はっきりした差がない」ことを表す。このことを「有' (冷、多少)」で表現することにする。「 $\supset$ 」は文全体を否定している。メタ言語では「今日は昨日

と寒さの差があるない」の意を表している。

用例 (12) の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、 $\gamma 1$ は「今天」と「昨天」が「経験者格」を、「气温 1」と「气温 2」が「属格 (対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。 $\gamma 2$ は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。 $\gamma 3$ は差がいくらかあること、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

1.4.3 現代中国語における最上級比較構文の論理構造と文型意味

中国語における最上級比較構文は古今を通じ語順に変化はほぼない。

(13) 再也没有比北京烤鸭更好吃的了。(北京ダックよりもっと美味しいものは全然ない。)

この文の論理式は次のようである。

$$\begin{array}{ccccccc}
 \sim \text{ト} & & \text{アル} & & \sim \text{ニ} & & \sim \text{ガ} \\
 (13') \text{ 比} & \text{[北京烤鸭以外的 (業)、北京烤鸭、有} & \text{(北京烤鸭以外的 (業)、[味道 1])} & & & & \\
 \text{アル} & \sim \text{ガ} & \sim \text{ト} & & & & \\
 & \alpha & \beta & & & & \gamma 1 \\
 \text{アル} & \sim \text{ニ} & \sim \text{ガ} & \text{ヒク} & \sim \text{カラ} & \sim \text{ヲ} & \\
 \& \text{有} & \text{(北京烤鸭、[味道 2])} & \& \text{有} & \text{'[減] ([味道 1]、[味道 2])、[差数]} & \\
 & & \text{アル} & & \sim \text{ニ} & & \sim \text{ガ} \\
 & & & & \gamma 2 & & \\
 & & & & (\text{ナイ}) \text{アル} & \sim \text{ニ} & \sim \text{ガ} \\
 \& \text{到} & \text{'[差数]、} & \text{有} & \text{'([好吃]、多少)} & \text{'[]} & \\
 \text{ナル} & \sim \text{ガ} & & \sim \text{ニ} & & & \\
 & & & \sim \text{トイウ状態ニ} & & & \\
 & & & \gamma 3 & & &
 \end{array}$$

ここで、(13') の意味を説明しよう。この文の「北京ダックよりもっと美味しいものは全然ない」という命題内容は論理式では「比' [北京烤鸭以外的 (菜)、北京烤鸭、有' (北京烤鸭以外的 (菜)、[味道 1]) & 有' (北京烤鸭、[味道 2]) & 有' {減' ([味道 1]、[味道 2])、[差数]} & 到' {[差数]、≧有' ([好吃]、多少)}]」のように表示できる。次に、この論理式について詳しく説明する。「有' (北京烤鸭以外的 (菜)、[味道 1])」は「“北京烤鸭以外的 (菜)” には [味道 1] がある」の意を、「有' (北京烤鸭、[味道 2])」は「“北京烤鸭” には [味道 2] がある」の意を、「有' {減' ([味道 1]、[味道 2])、[差数]} & 到' {[差数]、≧有' ([好吃]、多少)}]」は「[味道 1] から [味道 2] を引くと差がある (差が [好吃] が多少にないの程度になる)」の意を表す。「≧」は“有' ([好吃]、多少)” を否定している。

用例 (13) の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、 $\gamma 1$ は「北京烤鸭以外的 (菜)」と「北京烤鸭」が「経験者格」を、「味道 1」と「味道 2」が「属格 (対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。 $\gamma 2$ は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。 $\gamma 3$ は差がいくらかあること、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

なぜ例 (13) の論理構造が (13') のようになるのか。その理由は次の通りである。

方立 (2000) は量化詞否定規則について、次のように論じている。

(14) 量化詞否定規則: $\forall x \neg \phi(x) \longleftrightarrow \neg \exists x \phi(x)$

例: 大家都不喜欢王五。(すべての人は王五のことが好きでない。)

∴ 没有人喜欢王五。(王五のことを好きな人はいない。)(方立 2000: 197)

ここの“ $\forall$ ”は“普遍量化詞”であり、“すべてのもの (x)”を表す。

“ $\exists$ ”は“存在量化詞”であり、“少なくとも一つのもの(x)がある”を表す。

(14)を説明すると、“有人喜欢王五”の文は論理式で示すと、次のようになる。

「 $\exists x$ [人'(x) & 喜欢(x, 王五)]」(“至少有一个人喜欢王五(少なくとも一人は王五のことが好きである)”)の式になる。この式を否定すると、前に“没有”をつけて

「 $\neg \exists x$ [人'(x) & 喜欢(x, 王五)]」(“没有人喜欢王五(王五のことを好きな人はいない)”)の式になる。この式は、

「 $\forall x$ [人'(x) & $\neg$ 喜欢(x, 王五)]」(“大家都不喜欢王五(すべての人は王五のことが好きでない)”)の式と等値である。

量化詞否定規則を例(14)に適用すると、

$$(15) \neg \exists x \phi(x) \longleftrightarrow \forall x \neg \phi(x)$$

「有比北京烤鸭更好吃的(北京ダックよりもっと美味しいものがある)」という文の形式的な否定は「再也没有比北京烤鸭更好吃的了。(北京ダックよりもっと美味しいものが全然ない。)」となる。

「再也没有比北京烤鸭更好吃的了。(北京ダックよりもっと美味しいものが全然ない。)」という文は言い換えると「全都比北京烤鸭不好吃。(すべては北京ダックより美味しくない。)」のようになる。この二つの否定文をよく考えてみると、前者の“存在量化詞”を持つ文に対する否定と後者の“普遍量化詞”を持つ文の“着点”の部分に対する否定は同じである。つまり、“再也没有比北京烤鸭更好吃的了”の文は“全都比北京烤鸭不好吃”と等値であり、“北京ダックが一番美味しい”という「最上級比較」の意味を表している。ここの“すべて”は“北京ダック以外のすべての料理”と理解できる。

従って、筆者は例(13)の論理構造を(13')のように分析したので

ある。

2. 日本語における比較構文の意味と論理

2.1 先行研究

現代日本語における比較構文についての研究は使役構文、受身構文などの研究と比べて、非常に少ない。現在の日本語の文法に関する研究を調べると、比較構文はほとんど研究されていない。庵功雄など（2000）は「比較の表現はこれまで文法研究で取り上げられることが少なかった分野です（174 頁）」と指摘している。さらに、中国語の比較構文についての研究と比べ、日本語の比較構文に関する研究は不十分であると思う。

現代日本語における比較構文の種類と文型をまとめて表で表示すると、次の図 3 になる。

図 3

研究者	比較する種類	比較する文型	
		肯定表現	否定表現
友 清 陸 子・鈴木 雅実 (1992)	二者比較	～は～より～	*
	三者以上の比較	～一番～	*
	程度の比較	～の方が～	*
	量の比較	～は～の方が～	*
	状況の比較	～より～方が～	*
庵功雄な ど (2000・ 2001)	二つの事物を比較する表現	A は B より P だ	A は B ほ ど～ない
		A は B と同じぐら い P だ	*
	三つ以上の事物を比較する表現	X は Y で 最 も / 一番 P だ	*
		X ほど Y はいない	*
	基準・標準と比較する表現	P にしては Q	*
		P わりに (は) Q	*

安達太郎 (2001)	典型的な比較構文			X より Y(の方)が P	*
	比較述語を持たない比較構文			V より V	*
				N より V	*
	名詞の役割による	名詞の意味関係による比較構文	原因理由	X は Y より P	*
			目的		
			方向		
			資格		
		名詞の値の比較	指定文	X より P だ	*
			制限的連体修飾節		
	非典型的な比較構文			Y は X 以上に P	*
				X するくらいなら Y する方が P	*
				X というより Y	*
	副詞「より」による比較構文			より [述語]	*
[より 副詞] 述語				*	
[より 述語]主名詞				*	
野田時寛 (2001)	単文	二つのものの比較	一つを主題として	A は～	B は A ほど～ない
			一つを焦点として	A のほうが	
		同程度比較		A は B と同じくらい	*
				A は B くらい	
		三者以上のものの比較		A と B と C (と D・・・) の中/うちで	*
				A の中で	
	複文	～ほうが		A より B のほうが～	A は、B ほど～ない
		主題として		A は B より	
		どちら		～の/こと～どちら /どっち	
		同程度比較		～の/こと は ～の/ことと同じくらい～	

森山卓郎 (2004)	両者間での有差比較	XはYより～	?
		Xの方がYより～	?
		(Xは～が,) Yは もう少し/より/ さらに/もっと/遥 かに ～	×
		XとYでは、Xの 方が～	XとYで は、Yの 方が～ない
	両者間での同程度比較	Xに比べ、Yは～	Xに比べ、 Yは～ない
		XはYほど～	×
		XはYと同じくら い～	XはYほ ど～はない
	三者以上の最上級比較	Xの～はYと同じ くらいだ	XはYと 同じくらい ～ない
		XではYが 最も /一番 ～	×
		X ほど/より ～ Yはない	×

(*: 論じていない、?: 疑問がある、×: 持たない)

2.2 現代日本語における比較構文の論理構造と文型意味

ここで、筆者は先行研究を踏まえ、現代日本語の比較構文を「平等比較構文（同程度比較）」、「差異比較構文（二者間の有差比較）」と「最上級比較構文（三者以上の比較）」の三種類に分けてそれぞれの論理構造と文型意味について考察してみたい。

2.2.1 現代日本語における平等比較構文の論理構造と文型意味

2.2.1.1 平等比較構文の肯定表現の論理構造と文型意味

現代日本語における平等比較構文（同程度比較）の主な文型は「XはYと同じくらい～」である。

(16) 野生の舞茸は松茸と同じくらい高い。(森山 2004)

この文の論理式は次のようになる。

&至ル' ([差数]、零)]

4) “野生の舞茸”の文成分の内部の関係は「野生」という項と「舞茸」という項には“の”という「関係」がある」ことであり、論理式は“アル(ノ)′(野生、舞茸)”である。しかし、ここでの論述の中心は比較構文であるため、繁雑になるのを避けてそのまま“野生の舞茸”と記する。

ければならない。さらに、 $\gamma 1$ では「野生の舞茸」と「松茸」が「経験者格」を、「値段1」と「値段2」が「対象格」を表すので、格役割を表示する。 $\gamma 2$ は減法で差があること、つまり数量化を表している。 $\gamma 3$ は差のないこと、言い換えれば差がゼロの量に達していること、つまり一種の「着点」を表している。

2.2.1.2 平等比較構文の否定表現の論理構造と文型意味

現代日本語における平等比較構文（同程度比較）の「XはYと同じくらい～」という文型の否定表現は「XはYほど～はない」である。

(17) 椎茸は松茸ほど高くはない。(森山 2004)

この文の論理式は次のようになる。

$$\begin{array}{ccccccc}
 (\text{ナイ}) \sim \text{ト} & & \sim \text{ニ} & \sim \text{ガ} & & \sim \text{ニ} & \sim \text{ガ} \\
 (17') \supset \text{ホド'} [\text{椎茸、松茸、アル'} (\text{椎茸、[値段1]}) \& \text{アル'} (\text{松茸、[値段2]}) \\
 \text{アル} & \sim \text{ガ} & \sim \text{ト} & & & & \\
 \alpha & \beta & & & \gamma 1 & & \\
 & \sim \text{カラ} & \sim \text{ヲ} & & & \sim \text{ガ} & \sim \text{ニ} \\
 \& \text{アル'} \{ \text{引ク'} ([\text{値段1}], [\text{値段2}]), [\text{差数}] \} \& \text{至ル'} ([\text{差数}], \text{ゼロ})] \\
 & \sim \text{ニ} & \sim \text{ガ} & & & & \\
 & & & & & \sim \text{トイウ状態ニ} & \\
 \gamma 2 & & & & & & \gamma 3
 \end{array}$$

次に、(17')の意味を説明する。この文は「椎茸は松茸ほど高くはない」という意味を表し、その複合命題は論理式では「 $\supset \text{ホド'}$ [椎茸、松茸、アル' (椎茸、[値段1]) & アル' (松茸、[値段2]) & アル' {引ク' ([値段1], [値段2]), [差数]} & 至ル' ([差数], ゼロ)}]」のように表示できる。ここで、この論理式について詳しく説明する。「アル'

2.2.2 現代日本語における差異比較構文の論理構造と文型意味

2.2.2.1 「X は Y より～」

この文の論理式は次のようになる。

(18') ヨリ' [松茸、椎茸、アル' (松茸、[値段1]) & アル' (椎茸、[値段2])]

アル ～ガ ～ト

a β γ 1

次に、(18')の意味を説明する。この文は「松茸は椎茸より高い」という意味を表し、その複合命題は論理式では「ヨリ' [松茸、椎茸、アル' (松茸、[値段 1]) & アル' (椎茸、[値段 2]) & アル' {引'ク' ([値段 1]、[値段 2])、[差数]} & 至ル' ([差数]、イクラカ)]」のように表示できる。ここで、この論理式について詳しく説明する。「アル' (松茸、[値段 1])」は「“松茸”には論理形式の要素 [値段 1] がある」の意を、「アル' (椎茸、[値段 2])」は「“椎茸”にも論理形式の要素 [値段 2] がある」の意を、「アル' {引'ク' ([値段 1]、[値段 2])、[差数]} & 至ル' ([差数]、イクラカ)」は「[値段 1] から [値段 2] を引くと差がある」の意を表す。「より高い」の“高さ”は「はっきりした差がある」ことを表す。このことを「至ル' ([差数]、イカラカ)」で表現することにする。用例 (18) の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、 γ_1 は「松茸」と「椎茸」が「経験者格」を、「値段 1」と「値段 2」が「属格 (対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。 γ_2 は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。 γ_3 は差がいくらかあること、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

2.2.2.2 「Y に比べ X は～」

(19) 椎茸に比べ松茸は高い。(森山 2004)

この文の論理式は次のようになる。

$$\begin{array}{ccccccc}
 \sim\text{ト} & & \sim\text{ニ} & \sim\text{ガ} & \sim\text{ニ} & \sim\text{ガ} & \\
 (19') \text{ 比べ } [\text{松茸}, \text{椎茸}, \text{アル'} (\text{松茸}, [\text{値段 } 1]) \& \text{アル'} (\text{椎茸}, [\text{値段 } 2])] \\
 \text{アル'} \sim\text{ガ} \sim\text{ト} & & & & & & \\
 \alpha & \beta & & \gamma 1 & & & \\
 \sim\text{カラ} & \sim\text{ヲ} & & \sim\text{ガ} & \sim\text{ニ} & & \\
 \& \text{アル'} \{ \text{引} | \text{ク} \} ([\text{値段 } 1], [\text{値段 } 2]), [\text{差数}] \& \text{至ル'} ([\text{差数}], \text{イクラカ})] \\
 \sim\text{ニ} & \sim\text{ガ} & & & & & \\
 & & & & \sim\text{トイウ状態ニ} & & \\
 \gamma 2 & & & \gamma 3 & & &
 \end{array}$$

ここで、(19') の意味を説明する。この文は「椎茸に比べ松茸は高い」という意味を表し、その複合命題は論理式では「比べ」[松茸, 椎茸, アル' (松茸, [値段 1]) & アル' (椎茸, [値段 2]) & アル' {引|ク' ([値段 1], [値段 2]), [差数]} & 至ル' ([差数], イクラカ)] のように表示できる。ここで、この論理式について詳しく説明する。「アル' (松茸, [値段 1])」は「“松茸” には論理形式の要素 [値段 1] がある」の意を、「アル' (椎茸, [値段 2])」は「“椎茸” にも論理形成の要素 [値段 2] がある」の意を、「アル' {引|ク' ([値段 1], [値段 2]), [差数]} & 至ル' ([差数], イクラカ)」は「[値段 1] から [値段 2] を引くと差がある」の意を表す。「より高い」の“高さ” は「はっきりした差がある」ことを表す。このことを「至ル' ([差数], イクラカ)」で表現することにする。用例 (19) の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、 $\gamma 1$ は「松茸」と「椎茸」が「経験者格」を、「値段 1」と「値段 2」が「属格 (対象格)」を表すので、「格役割」

を表示する。 $\gamma 2$ は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。 $\gamma 3$ は差がいくらかあること、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。論理構造からみると、(18)は(19)の文と比較標識(“比べ”と“より”)を除き、ほかの項と文型意味はまったく同じである。

2.2.2.3 「Yに比べXは～ない」

「Yに比べXは～ない」は2.2.2.2の否定表現である。(森山2004の考察により、2.2.2.1の文型は否定表現を持たないと指摘される。)

(20) 松茸に比べ椎茸は高くない。(森山2004)

この文の論理式は次のようになる。

$$\begin{array}{ccccccc}
 (\text{ナイ}) \sim \text{ト} & & \sim \text{ニ} & \sim \text{ガ} & & \sim \text{ニ} & \sim \text{ガ} \\
 (20') \supset \text{比べ} [\text{椎茸、松茸、アル'} (\text{椎茸、} [\text{値段1}]) \& \text{アル'} (\text{松茸、} [\text{値段2}]) \\
 \text{アル'} \sim \text{ガ} \sim \text{ト} & & & & & & \\
 \alpha & \beta & & & \gamma 1 & & \\
 \sim \text{カラ} & \sim \text{ヲ} & & & \sim \text{ガ} & \sim \text{ニ} & \\
 \& \text{アル'} \{ \text{引ク'} ([\text{値段1}], [\text{値段2}]), [\text{差数}] \} \& \text{至ル'} ([\text{差数}], \text{イクラカ})] & & & & \\
 & \sim \text{ニ} & \sim \text{ガ} & & & & \\
 & & & & & \sim \text{トイウ状態ニ} & \\
 \gamma 2 & & & & & \gamma 3 &
 \end{array}$$

ここで、(20')の意味を説明する。この文は「松茸に比べ椎茸は高くない」という意味を表し、その複合命題は論理式では「 $\supset$ 比べ' [椎茸、松茸、アル' (椎茸、[値段1]) & アル' (松茸、[値段2]) & アル' {引ク' ([値段1]、[値段2])、[差数]} & 至ル' ([差数]、イクラカ)]」のように表示できる。ここで、この論理式について詳しく説明する。「ア

ル' (椎茸、[値段 1])」は「“椎茸” には論理形式の要素 [値段 1] がある」の意を、「アル' (松茸、[値段 2])」は「“松茸” にも論理形式の要素 [値段 2] がある」の意を、「アル' {引' ク' ([値段 1]、[値段 2])、[差数]} & 至ル' ([差数]、イクラカ)」は「[値段 1] から [値段 2] を引くと差がある」の意を表す。「より高い」の“高さ” は「はっきりした差がある」ことを表す。このことを「至ル' ([差数]、イクラカ)」で表現することにする。「フ」は文全体を否定している。つまり、「[椎茸] は [松茸] と [値段] の差があるない」のメタ言語の意味を持つ。用例 (20) の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、 $\gamma 1$ は「椎茸」と「松茸」が「経験者格」を、「値段 1」と「値段 2」が「属格 (対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。 $\gamma 2$ は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。 $\gamma 3$ は差がいくらかあること、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表している。

2.2.3 現代日本語における最上級比較構文の論理構造と文型意味

(21) 兄は家族の中で一番背が高い。(庵功雄など 2001)

この文の論理式は次のようになる。

$$\begin{array}{c}
 \sim \text{ト} \qquad \qquad \qquad \sim \text{ニ} \quad \sim \text{ガ} \\
 (21') \text{ 一番' [兄、兄以外の家族メンバー}^{5)}\text{、アル' (兄、[身長 1]) \&} \\
 \text{アル} \quad \sim \text{ハ} \qquad \qquad \sim \text{ト} \\
 \alpha \qquad \qquad \beta \qquad \qquad \gamma 1
 \end{array}$$

5) “兄以外の家族メンバー” の文成分の内部の関係は「“兄以外” という項と “家族メンバー” という項には “の” という “関係” がある」ことであり、論理式は “アル (ノ)' {以外' (兄)、家族メンバー-|” である。しかし、ここでの論述の中心は比較構文であるため、繁雑になるのを避けてそのまま “兄以外の家族メンバー” と記する。

～ガ

～ガ ～ニ

25

～トイウ状態ニ

ここで、(21')の意味を説明する。この文は「兄は家族の中で一番背が高い」という意味を表し、その複合命題は論理式では「一番'兄、兄以外の家族メンバー、アル'(兄、[身長1]) & アル'(兄以外の家族メンバー、[身長2]) & アル' {引'ク' ([身長1]、[身長2])、[差数]} & 至ル' ([差数]、イクラカ) }」のように表示できる。ここで、この論理式について詳しく説明する。「アル'(兄、[身長1])」は「兄」には論理形式の要素「身長1」がある」の意を、「アル'(兄以外の家族メンバー、[身長2])」は「兄以外の家族メンバー」にも論理形式の要素「身長2」がある」の意を、「アル' {引'ク' ([身長1]、[身長2])、[差数]} & 至ル' ([差数]、イクラカ)」は「[身長1] から [身長2] を引くと差がある」の意を表す。用例 (21) の意味は前述のすべての命題内容を含んでいることになる。さらに、 γ_1 は「兄」と「兄以外の家族メンバー」が「経験者格」を、「身長1」と「身長2」が「属格 (対象格)」を表すので、「格役割」を表示する。 γ_2 は減法で差があること、つまり「数量化」を表している。 γ_3 は差がいくらかあること、言い換えれば「差がいくらかの量に達している」こと、つまり一種の「着点」を表

している。

3. 現代中国語と現代日本語における比較構文の比較対照

ここで、前述の研究に基づき、現代中国語における比較構文と現代日本語における比較構文との共通点と相違点を取りあげたい。

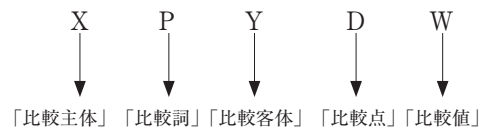
まず、現代中国語における比較構文と現代日本語における比較構文の文型と構造をまとめると、後掲の図4になる。

3.1 共通点

3.1.1 構成成分について

文全体からみると、現代中国語と日本語の比較構文は「比較主体」、「比較客体」、「比較詞」、「比較点」と「比較値」の五つの基本成分を持たなければならない（文脈により省略される場合がある）。たとえば、

(22) 中国語： 张三 比 李四 个子 高。



日本語： 兄は 母 より 背が 高。

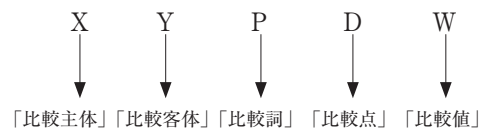


図 4

比較範疇	中国語の主な文型		論理構造	表す意味	日本語の主な文型		論理構造	表す意味
	肯定表現	否定表現			肯定表現	否定表現		
平等比較	X + 跟 / 像 / 和 / 同 + Y + 一样 ~	X + 跟 / 像 / 和 / 同 + Y + 不一样 ~	平等比較詞「 a , β , 有「 a , [論理形式 1]」 & 有「 β , [論理形式 2]」 & 有「減」([論理形式 1], [論理形式 2]), [差数], 零」到「([差数], 零)」	a が β と差がないこと	X は Y と じくらい ~	X は Y と 同 じくらい ~ な い	平等比較詞「 a , β , アル「 a , [論理形式 1]」 & アル「 β , [論理形式 2]」 & アル「同」ク「([論理形式 1], [論理形式 2]), [差数]」 & 至ル「([差数], ゼロ)」	a が β と差がないこと
	X + 有 + Y + 这么 / 那么 ~	X + 没有 + Y + 这么 / 那么 ~			X は Y ほ ど ~	X は Y ほ ど ~ は ない		
差異比較	X + 比 + Y + (还 / 更) ~	X + 不 + 比 + Y + (还 / 更) ~	差異比較詞「 a , β , 有「 a , [論理形式 1]」 & 有「 β , [論理形式 2]」 & 有「減」([論理形式 1], [論理形式 2]), [差数]」 & 到「([差数], 多少)」	a が β と差があること	X は Y よ り (も っ と) ~	A は B ほ ~ ない	差異比較詞「 a , β , アル「 a , [論理形式 1]」 & アル「 β , [論理形式 2]」 & アル「同」ク「([論理形式 1], [論理形式 2]), [差数]」 & 至ル「([差数], イクラカ)」	a が β と差があること
					X の 方 が Y よ り ~			
最上級比較	(在・・・里 / 中) X + 最 / 頂 ~		最上級比較詞「 a , a 以外の全部, 有「 a , [論理形式 1]」 & 有「 β , [論理形式 2]」 & 有「減」([論理形式 1], [論理形式 2]), [差数]」 & 到「([差数], 多少)」	a が a 以外のすべてと差があること	X は Y (の中) で 最 も / 一番 ~		最上級比較詞「 a , a 以外のすべて, アル「 a , [論理形式 1]」 & アル「 β , [論理形式 2]」 & アル「同」ク「([論理形式 1], [論理形式 2]), [差数]」 & 至ル「([差数], イクラカ)」	a が a 以外のすべてと差があること
	X + 比 + Y (疑問詞) + 都 ~				X は Y (疑問詞) より も ~			
	(再也) 没有比 + Y + 更 / 还 / 再 + (的 + NP) + 了				X ほ ど Y は い ない			

3.1.2 比較範疇について

比較範疇からみると、現代中国語と日本語の比較構文は両方とも「平等比較構文」、「差異比較構文」と「最上級比較構文」に分けられる。例をあげると、次のようになる。

図 5

言語 比較範疇 \ 用 例	中国語	日本語
平等比較構文	张三跟李四一样聪明	鈴木さんは林さんと同じぐらい頭がいい
差異比較構文	张三比李四聪明	田中さんは林さんより頭がいい
最上級比較構文	班里张三最聪明	富士山は日本で一番高い山です。

3.1.3 論理構造と意味について

前述の論理分析からみると、現代中国語と日本語における「平等比較構文」、「差異比較構文」と「最上級比較構文」の論理構造と意味は同じである。表でまとめると、次のようになる。

図 6

言語 比較範疇 \ 論理構造	中国語	日本語	意味
平等比較構文	平等比較詞' [a, β, 有' (a, [論理形式 1]) & 有' (β, [論理形式 2]) & 有' {減' ([論理形式 1], [論理形式 2]), [差数]} & 到' ([差数], 零)]	平等比較詞' [a, β, アル' (a, [論理形式 1]) & アル' (β, [論理形式 2]) & アル' {引'ク' ([論理形式 1], [論理形式 2]), [差数]} & 至 ル' ([差数], ゼロ)]	a と β は差がないこと

差異比較構文	差異比較詞' [a , β , 有' (a , [論理形式1]) & 有' (β , [論理形式2]) & 有' {減' ([論理形式1], [論理形式2]), [差数]} & 到' ([差数], 多少)]	差異比較詞' [a , β , アル' (a , [論理形式1]) & アル' (β , [論理形式2]) & アル' {引'ク' ([論理形式1], [論理形式2]), [差数]} & 至ル' ([差数], イクラカ)]	a と β は差があること
最上級比較構文	最上級比較詞' [a , a 以外の全部, 有' (a , [論理形式1]) & 有' (β , [論理形式2]) & 有' {減' ([論理形式1], [論理形式2]), [差数]} & 到' ([差数], 多少)]	最上級比較詞' [a , a 以外のすべて, アル' (a , [論理形式1]) & アル' (β , [論理形式2]) & アル' {引'ク' ([論理形式1], [論理形式2]), [差数]} & 至ル' ([差数], イクラカ)]	a と a 以外のすべては差があること

図6からみると、現代中国語と日本語における比較構文は両方とも「三項関数」に属する。具体的表示は「比較詞' (a , β , $\gamma 1$ & $\gamma 2$ & $\gamma 3$)」になる。この a は「比較主体 (話題)」であり、 β は「比較客體 (副話題)」であり、 $\gamma 1$ は「格役割」を表し、 $\gamma 2$ は「数量化」を表し、 $\gamma 3$ は「着点」を表す。 $\gamma 1$ 、 $\gamma 2$ と $\gamma 3$ は γ からの拡張と考える。従って、比較構文の論理式は「拡張三項関数」と言ってもよい。

3.1.4 比較詞の役割について

タイプ理論を用いた分析および有限オートンマトンと順序論理回路のモデルを用いる論理式の成立のプロセスの分析により、現代中国語と日本語における比較構文が用いる「比較詞 (“比”、“より” など)」は品詞からみると「前置詞」、「後置詞」や「副詞」であるが、実際は「動詞」の役割を担っている。文の入力記憶からみると、「比較詞」は文の中心であり、「比較詞」の現れとともに、文全体の構造が決められる。

中国語における比較構文と日本語における比較構文は以上の共通性をもつ。これらの共通点は日本語と中国語だけの共通点ではなくて、世界のほとんどの言語の共通点である可能性もある。

3.2 相違点

現代中国語と日本語の両言語の比較標識は位置と語順が異なる。

中国語はシナ・チベット語族に属する言語で、「現存する世界最古の言語」である。中国語の特徴は声調を持ち、孤立語で、単音節言語であることが挙げられる。「孤立語」とは、言語の形態論上の、古典的類型論における分類のひとつである。孤立語に分類される言語は、単語に接頭辞や接尾辞のような形態素を付着（膠着）させたり、語頭や語尾などの形を変化（屈折）させたりすることがない。日本語の系統は明らかでなく、解明される目途も立っていない。いくつかの仮説があるが、いまだ総意を得るに至っていない。アルタイ諸語に属するとする説は、明治時代末から特に注目されてきた。その根拠として、古代の日本語（大和言葉）において語頭にr音（流音）が立たないこと、一種の母音調和がみられることなどが挙げられる。ただし、アルタイ諸語に属するとされるそれぞれの言語自体、互いの姉妹関係が証明されているわけではなく、したがって、古代日本語に上記の特徴がみられることは、日本語が類型として「アルタイ型」の言語であるという以上の意味をもたない。日本語の特徴は膠着語で、ある単語に接頭辞や接尾辞のような形態素を付着させることで、その単語の文の中での文法関係を示すことである。

文法的関係は語順などによって示される特徴をもつ。中国語の語素の大部分は単音節で、多音節の語素は非常に少ない。一つの単音節の語素は、文字の上では漢字一字で書き表わされる。語素の一段上の単位が単

語である。単語と単語が一定の規則に従って結合し、一定の意味を表すものが連語である。連語は独立した文ともなるし、また文の一部としても用いられる。例えば、「他来了（彼が来た）」は一つの文でもあり、また「我知道他来了（私は彼が来たことを知っている）」の中では、文の一部であって、「知道」の目的語である。文とは、相対的にまとまった意味があるし、一定の語調をもち、前後にやや大きなポーズをおく言語単位である。文は連語によって構成され、長いものも短いものもあり、最短の文は単語一つで成り立っている。例えば、「你去不去？（あなたは行くか）」「去。（行く）」の「去（行く）」は単語一つで文でもある。中国語の語順は「S（主語）+V（述語）+O（賓語—目的語）」である。例えば、「我去学校。（私は学校へ行く）」の文の主語は「我」で、述語は「去」で、賓語（目的語）は「学校」である。「你在干什么呢？（何しているの）」の文の主語は「你」で、述語は「干」で、賓語（目的語）は「什么」である。英語で「I read a book.」という語順をSVO型（主語・動詞・目的語）と称する説明にならっていえば、日本語の文はSOV型ということになる。もっとも、厳密にいえば、英語の文に動詞が必須であるのに対して、日本語文は動詞で終わることもあれば、形容詞や名詞＋助動詞で終わることもある。そこで、日本語文の基本的な構造は、「S（主語 subject）-V（動詞 verb）」というよりは、「S（主語）-P（述語 predicate）」という「主述構造」と考えるほうが、より適当である。日中両言語の語順の特徴からみると、中国語の前置詞は体言の前、日本語の格助詞は体言の後ろに位置する理由も明らかに分かってくる。これも日中両言語の相違点である。

中国語は前置詞型言語であり、日本語は後置詞型言語である。その特徴は次のようである。

(23) SVO（中国語）：前置詞（比較標識）＋基準名詞＋形容詞

SOV（日本語）：基準名詞＋後置詞（比較標識）＋形容詞

従って、現代中国語における比較構文と日本語における比較構文の文型は形式上違いがあるが、その対応する関係は次の図7の通りになっている。

図7

比較範疇	中国語の主な文型		日本語の主な文型	
	肯定表現	否定表現	肯定表現	否定表現
平等比較	X+ 跟 / 像 / 和 / 同 + Y + 一样 + 形容詞	X+ 跟 / 像 / 和 / 同 + Y + 不一样 + 形容詞	XはYと同じくらい + 形容詞	XはYと同じくらい + 形容詞 + ない
	X+ 有 + Y + 这么 / 那么 + 形容詞	X+ 没有 + Y + 这么 / 那么 + 形容詞	XはYほど + 形容詞	XはYほど + 形容詞 + はない
差異比較	X+ 比 + Y + (还 / 更) + 形容詞	X+ 不 + 比 + Y + (还 / 更) + 形容詞	XはYより(もっと) + 形容詞	AはBほど + 形容詞 + ない
			Xの方がYより + 形容詞	
最上級比較	(在・・・・里 / 中) X+ 最 + 形容詞		XはY(の中)で 最も / 一番 + 形容詞	
	X+ 比 + Y + 都 + 形容詞		XはどのY(疑問詞)よりも + 形容詞	
	(再也) 没有比 + Y + 更 / 还 / 再 + (的 + NP) + 了		Yほど～のものはない	

4. まとめ

中日両言語における比較構文に対する研究の方法は多様である。方法は統語構造と語用論的意味からの研究をメインとしている。しかし、明示的に文の意味を解明するためには、より科学的な研究方法、たとえば、形式意味論という研究方法が必要だと考えられる。

本研究は明示的な表示手段として採用する「論理構造」についての基本的な表記上の知識や概念を導入する。その上で比較構文について、そ

れぞれの具体例を述語論理を援用し、意味分析の過程を明示的に記述するとともに「平等比較構文」、「差異比較構文」と「最上級比較構文」の三種類の比較構文の論理構造と文型意味を解明するための記述の一般化を図る。述語論理表記は一見、単純におもえるが、実際は複雑な約束がある。関数の位置に生起する動詞は「その動詞により表される動作・行為をしている個体の集合」と解釈され、その結果直後にくる「項で表された個体」と同質のものとして、いわば「計算」の基礎を作っているのである。自明のことであるが「動作・行為」そのものでは「個体」と質が異なるが、「個体の集合」は「個体」という点で個体と同質だからである。論理式は、中国語とか日本語に特有の構造ではなく、世界中のすべての自然言語に共通する中間言語であると考ええる。論理式は世界中のすべての言語の文の内部的構造や文成分の結びつきの規則を示しているので、外国語を教えるときにも役立つと考えられる。

参考文献

(一) 中国語関係の参考文献

- (1) 车 竞 2005 「现代汉语比较句论略」『湖北师范学院学报』2005 (3) : 60-63
- (2) 丁声树 1961 『现代汉语语法讲话』北京商务印书馆
- (3) 方立 2000 『逻辑语文学』北京语言大学出版社
- (4) 房玉清 1992 『实用汉语语法』北京语言学院出版社
- (5) 冯春田 2000 『近代汉语语法研究』山东教育出版社
- (6) 高名凯 1985 『汉语语法论』商务印书馆
- (7) 黄晓惠 1992 「现代汉语差比格式的来源及演变」『中国语文』1992 (3) : 213-224
- (8) 蒋绍愚・曹广顺 2005 『近代汉语语法史研究综述』商务印书馆
- (9) 来飞燕 2008 「“有”字比较句中的形容词」『绍兴文理学院学报』2008 (3) : 79-81
- (10) 李成才 1991 「“跟……一样”用法浅谈」『语言教学与研究』1991 (2)
- (11) 李剑锋 2000 「“跟X一样”及相关句式考察」『汉语学习』2000 (6) : 71-76
- (12) 黎锦熙 1992 『新著国语语法』商务印书馆

- (13) 李向农 1999 「再说“跟……一样”及其相关句式」『语言教学与研究』1999 (3): 85-96
- (14) 刘丹青・徐烈炯 1998 「焦点与背景、话题及汉语“连”字句」『中国语文』1998 (4): 243-251
- (15) L.Stassen. 1985 Comparison and Universal Grammar. Basil Blackwell
- (16) 刘苏乔 2002 「表比较的“有”字句浅析」『语言教学与研究』2002 (2): 50-55
- (17) 刘 焱 2004 『现代汉语比较范畴的语义认知基础』上海学林出版社
— — 2004 「“比”字句对比项选择的语义认知基础」『上海财经大学学报』2004 (6) No.5: 76-81
- (18) 刘月华・潘文娉・故 韓 2001 『实用现代汉语语法(增订本)』商务印书馆
- (19) 刘 颖 2000 「现代汉语中几种表示相同比较的句式」『安徽师范大学学报(人文社会科学版)』2000 (3): 436-440
- (20) 刘振平 2007 「谈“X跟Y一样W”语式的语义预设」『信阳师范学院学报(哲学社会科学版)』2007 (27) No.1: 93-95
- (21) 陆俭明 1980 「“还”和“更”」北京大学汉语语言学研究中心『语言学论丛』编委会编『语言学论丛(第六辑)』商务印书馆 1980:191-209
— — 1982 「析“像……似的”」『语文月刊』1982 (1): 1-12
— — 1981 「“更加”和“越发”」『语文研究』1981 (1): 22-29
- (22) 陆俭明・马真 1985 『现代汉语虚词散论』北京大学出版社
- (23) 吕叔湘 1990 [1942 初稿]『吕叔湘文集(第一卷)——中国文法要略』商务印书馆
— — 1999 [1980 初稿]『现代汉语八百词(增订本)』商务印书馆
- (24) 马建忠 2007 [1898 初稿]『马氏文通』商务印书馆
- (25) 马 真 1986 「“比”字句内比较项 Y 的替换规律试探」『中国语文』1986 (1): 97-105
— — 1988 「程度副词在表示程度比较的句式中的分布情况考察」『世界汉语教学』1988, (2): 81-88.
- (26) 任海波 1987 「现代汉语“比”字句结论项的类型」『语言教育与研究』1987 (4): 91-103
- (27) 邵敬敏・刘焱 2002 「比字句强制性语义要求的句法表现」『汉语学习』2002 (10) No.5
- (28) 沈家煊 2001 「跟副词“还”有关的两个句式」『中国语文』2001 (6): 483-493
- (29) 宋玉柱 1995 『语法论稿』北京言语大学出版社
- (30) 松村文芳 2011 「現代中国語の主要な統語構造の論理形式」大東文化大学—国際シンポジウム
— — 2005 「「把構文」と「被構文」に用いられる「给」の意味と論理」『語学教育研

究論叢第 22 号』

- (31) 太田辰夫著 (蔣紹愚・徐昌華譯) 1987 [1958 初稿] 『中国語歴史文法』 北京大学出版社
- (32) 唐厚广 1997 「“不如” 句研究」 『錦州师范学院学报』 1997 (2) : 119-121
- (33) 王力 1985 『中国現代語法』 商務印書館
- (34) 相原茂 1992 「汉语比較句の二つの否定形式—“不比” 型和“没有” 型」 『語言教學与研究』 1992 (3) : 73-87
- (35) 謝仁友 2004 「宋元差比句研究」 『語言學的理論与应用』 北京語言學會編 (上)
- (36) 邢福義 2000 「“最” 義級層的多個體涵量」 『中国語文』 2000 (1) : 16-26
- (37) 許國萍 1996 「“比” 字句研究綜述」 『汉语学习』 1996 (6) : 28-31
— — 2007 「現代汉语差比範疇研究」 上海學林出版社, 2007 又見許國萍「現代汉语差比範疇研究」 復旦大學博士學位論文 2005 期
- (38) 張豫峰 1998 「表比較的“有” 字句」 『語文研究』 1998 (4) : 12-17
- (39) 趙金銘 2001 「論汉语的“比較” 範疇」 『中国語言學報 (第十期)』 商務印書館 2001 : 1-16
— — 2002 「差比句語義指向類型比較研究」 『中国語文』 2002 (5) : 452-458
- (40) 趙元任 1982 [1968 初稿] 『中国語的文法』 丁邦新譯 香港中文大學出版社
— — 1979 『A Grammar of Spoken Chinese』 The University of California Press
- (41) 朱德熙 1982 『語法讲义』 商務印書館
— — 1982 「說“跟……一樣”」 『汉语学习』 1982 (1)
— — 2003 [1980 初稿] 『現代汉语語法研究』 商務印書館
- (42) 鄒崇理 2000 『自然言語的邏輯分析』 北京大学出版社

(二) 日本語關係の参考文献

- (1) 安達太郎 2001 「比較構文の全体像」 『広島女子大学学部紀要』 2001 (9) : 1-19
— — — 平成十七年 「「ほど」による程度構文と否定」 『広島女子大学学部紀要』 第二十一号 : 1-14
- (2) 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘著 2000 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 スリーエーネットワーク
— — — 2001 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 スリーエーネットワーク
- (3) 渡辺 実 1986 「比較の副詞—「もっと」を中心に—」 『学習院大学言語共同研究所紀要』

1986 (8)

— — — 1990 「程度副詞の体系」『上智大学国文学論集』1990 (23)

- (4) 渡辺史央 1995 「日本語の比較表現についての考察—比較の基準と程度性について—」
『神戸外国語大学紀要』1995 : 65-75
- (5) Ludwig Wittgenstein 著・野矢茂樹訳 2010 (2003 初稿) 『論理哲学論考』 岩波書店
- (6) 森山卓郎 2004 「日本語における比較の形式」『言語』33-10 : 32-39 大修館書店
- (7) 石神照雄 1980 「比較の構文構造—(程度性)の原理—」『文芸研究』1980 (93) : 41-49
- (8) 益岡隆志・田窪行則 1992 『基礎日本語文法 改訂版』 くろしお出版
- (9) 友清睦子・鈴木雅美 平成3年 「日本語会話文における比較表現の分析」 情報処理学会第
42回(平成3年前期)全国大会
- (10) 野矢茂樹 2011 (2006 初稿) 『ウィットゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む』 筑摩書
房
- (11) 野田時寛 2001 「複文研究メモ(5) —程度・比較構文—」『中央大学論集』2001 (22) :
1-16
- (12) 佐野由紀子 1998 「程度副詞と主体変化動詞との共起」『日本語科学』1998a (3) : 99-
112
- — — 1998 「比較に関わる程度副詞について」『国語学』1998b (195) : 99-112

(三) 中国語と日本語の対照研究に関する参考文献

- (1) 奥津敬一郎・徐昌华 1982 「日本語と中国語の比較構文—「ホド」を中心として—」『都
大論究』第19号 : 1-15
- (2) 奥田 寛 1981 「日・中両国語の比較文—おもにその比較成分のあらわれかたをめぐって」
『日本語と中国語の対照研究第5号』 : 117-136
- (3) 李伟・杨政华 2009 「汉语差比句对比解析」『考试周刊』2009 (6) : 101-103
- (4) 秦礼君 2006 『日汉比较语法』 中国科学技术大学出版社

(四) その他の参考文献

- (1) 辞海编辑委员会编 1989 『現代漢語辞海』 上海辞典出版社
- (2) 林大監修 1987 『国語大辞典言泉』 小学館
- (4) 新村出編 2006 『広辞苑(第六版)』 岩波書店
- (5) 中国社会科学院语言研究所词典编辑室編 1987 『現代漢語大辞典』 商务印书馆